

## VII. 板橋区の昆虫類の現状

板橋区昆虫類等実態調査は 1985 年度の第 1 回調査から今回で 4 回目を数える。対象としている昆虫類はおもにトンボ類、バッタ類、チョウ類といった目立つ大型の種であるが、本年度調査においてもミヤマサナエ、コバネヒメギス、ミヤマチャバネセセリといった種が新たに確認されている。しかもこれらの種は在来種であり顕著に分布を拡げている訳でもない。新たな種が確認されたことは調査の頻度や気象条件などに起因するとも考えられるが、区内に懐の深い豊かな自然が今も残されているからとは言えるだろう。生物の場合、特に昆虫類では一過性の偶産種がよくみられる。しかしこれとて嗜好される環境が残されていなければ立ち寄ることも無いのではないか。

トンボ類では水生植物の豊富な池沼に生息するセスジイトトンボ、オオイトトンボ、ムスジイトトンボなどのクロイトトンボ属の種が再確認されず心配されるころではあるがその他の種に関していえば概ね安定した生息状況である。また、バッタ類やチョウ類においても同様に、過年度の調査で確認された種においては多くの種が継続して確認されている。

一方で、近年各地で例をみる地球温暖化の影響といわれている南方系の種の北への進出や新たな外来種の移入が板橋区内でも顕著にみられた。複数の確認が得られたナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、ツマグロヒョウモンは、いずれも過年度調査では確認されていない。また、本年度調査において確認地点数が増加し、羽化殻もみられたクマゼミのほか、以前は日本本土には定着していないと考えられていたナカグロクチバ(蛾類)を荒川河川敷にて数個体確認した。外来種についてはアカホシゴマダラが成虫で複数確認されたほか、赤塚城址において既に幼虫も確認されている。また、調査対象種ではないが、全国的に分布拡大の著しいアワダチソウゲンバイが荒川河川敷において非常に多数の個体が確認された。

このように板橋区内の昆虫相の現状は 2000 年度調査時と比較しても大きく変わりつつある。そのため、今後は昆虫類相の現状を把握しつつ緑地の保全をしていくことはもとより、同時に板橋区を取り巻く周辺地域の状況にも目を向けていく必要があると思われる。

赤塚城址ではハヤシノウマオイが林縁で鳴き、アカシジミがクヌギの葉で休み、ヤマトタマムシがエノキの樹冠を飛び回っていた。また荒川河川敷ではギンイチモンジセセリが草地を舞い、コムラサキがヤナギ類の周囲を盛んに飛び交っていたほか、クマコオロギ、キンヒバリなど多くのバッタ類が鳴き交わし、9 月には市街地近傍であることを忘れる程の虫の声であった。都内、特に 23 区内においては樹林、草地ともにこれだけの自然がみられる場所は無二と言えるかも知れない。こうした現状を記した本報告書が、板橋区内の緑地保全に際して少しでも役立つことを期待するとともに、都内各所で失われてしまった緑豊かな景観を今も有する板橋区の自然が永久に残されることを切に望んで止まない。